

ソナム・ワンディ・プティアさんとのであい

につれしいよ。もし縁がなかったら、私は一生不安を抱えたままインドで菩薩の道を行

去る6月7日(土)ネパ-ル国カトマンズ本願寺の開教所長ソナム・ワンディ・プティアさん(35歳)をお迎えして浄光寺で講演会を開催しました。目の覚めるような感動とよるこびが会場を包み込みました。



チベット仏教のエリート僧ソナムさんは浄土真宗に改宗し、「親鸞さまの教えを世界中に広めたい」と、現在お釈迦さまの誕生の国であるネパールの首都カトマンズから親鸞さまの教えを発信しておられます。ソナムさんとお念仏とのであい、それはまさに親鸞聖人が二十九歳の時、法然上人にであわれてお念仏の門に入られた姿を彷彿させます。

ソナムさんは流ちょうな日本語で、お参りの一人一人に語りかけるように、「親鸞さまの教えを世界中に広めると、みんながうれしくなる。私はこの教えにであって本当

チベット仏教から浄土真宗に改宗

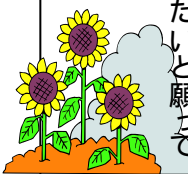
以下中国新聞の洗心欄に掲載された記事(二〇〇八年五月十五日号)を紹介いたします。

ずだった。しかし、家に帰ると食欲や物欲など煩惱がよみがえり、一年もすると「普通の人」に戻ってしまった。あまりにもショックで、ブッダガヤへ。菩提樹の下で瞑想を繰り返したが、煩惱は消え去らなかつた。

「他力」という言葉を初めて聞いた。人は煩惱を自力でめぐい去れず、阿彌陀如来の力を信じて念仏を称えれば、煩惱だらけの凡夫は救われる、という。教義を深く知るため、向坊さんがネパールの首都カトマンズに開いていた社会福祉仏教研究所で学び、二〇〇二年に初来日。京都市の中央仏教

学院で真宗を修めた。「阿彌陀様がみなを平等に救おうと考え、仏になるまでに長大な時間がかかった。なのに私も同じことをやるうとしていた」とソナムさん。「仏教では大切な教えを隠し、修行を積んだ一番弟子だけに教えることが多い。ところが親鸞聖人は他力の教えをみなに伝えたいの広い人」と敬う。

二〇〇三年に得度して帰国。チベット仏教僧の父ベゲさん(七十八)は「親鸞の考え方は理解できる」と言い、改宗に反対はしなかつた。カトマンズ社会福祉仏教研究所を布教の拠点に衣替えし、浄土真宗本願寺派は二〇〇五年、同所をカトマンズ本願寺に承認。現在、信者は三百人を超え、これまでに四人の僧侶を育てた。



生きてても死んでも 仕合せのどまんなか



七年前の平成十四年十月三十日、浄光寺前住職釋温月は享年八十八歳の生涯を終え、お浄土へ帰らせていただいた。父の残してくれたことばの中にこんなよるこびがある。

生きてても 死んでも 仕合せの どまんなか 釋温月

阿彌陀さまのみ教えをバックボーンに生きる人生は、何よりも明るくて、何よりも力強い。

「人生は苦なり」と釈尊が初転法輪で説かれたように、生きるとは苦惱そのものである。「オギャー」とこの世に生を受けて、いのち終わるその時まで苦惱は続く。

高校時代にK君という親友がいた。三年生のとき授業中突然彼の姿が見えなくなった。雨の中友達二人と手分けして探すと、高校から三百メートル離れた林のなかでずぶ濡れになってしゃがみこんでいる彼を見

つけた。生きることに思い悩み苦しんでいた。彼と一緒に泣きながらしばらくそこに佇んでいたことを懐かしく思い出す。その時交わした言葉が今でも忘れない。「うらいね、くるしいね、きつと二十歳になると楽になるよ、それまで一緒にがんばって生きよう」。何故二十歳と言ったのかわからないが、大人になると悩みが減ると思ったのだろうか。

博多に「仙崖和尚」という有り難いお坊さんがおられた。臨終を迎えるとき、弟子が和尚に、何か一言ことばをとお願いとすると、「死にともない 死にともない ほんまほんま」と言われたそうである。

この言葉にであった時、何とも云えない温もりと親しみを感じた。誰一人いのち終えるその時まで苦惱の消える人はいない。この肉体がある限り煩惱は沸き起ころ。でも、「なまあみだぶつ」とお念仏をよりどころに生きる人生は、「死にともない 死

にともない」と云っているそのまま、苦惱をかかえているそのまま救われていくのである。

如来の作願をたずねれば 苦惱の有情をすてずして 回向を首としたまいて 大悲心をば成就せり (親鸞聖人浄土和讃)

苦惱の中でもしあわせ

お念仏をよりどころに生きる人生は、悩んだり悲しんだりしているまま、ごんごんながあつてもおまえを見捨てないぞ。《ひとりしないな》《おまえの苦惱はすべし》と絶えず私の上

にまで届いてくださる阿彌陀さまのはたらきにあわせていたただくのである。

私たちは、太陽に近づくとほどきえない。しかし太陽は光となり温もりとなってわたしのところに至り届いていく。阿彌陀さまは「なんまんだぶつ」の声となって私のところに至り届いて下さっている。いつでも如来さまが先手である。

今、死んでもしあわせ?

今死にたい、と本気で思う人はいない。先日法事にお参りした時、八十七歳のおばあちゃんが「いんげさん、あまり長生きはしたくありません。もう何時お迎えが来てもいいです。」お勤めが終わって帰る際に「いんげさん、来月の命日朝一番に勤めてもらえませんか?」と尋ねると、「その日は病院を予約していますので...」

条件が整うと今日のこの日がわからない。死は一人の例外もない。皆いつかは別れがくる。そのときは誰にも予測がつかない。でも、お念仏をよりどころに生きる人生は、今いのち終えても、間に合っている。まさに「死んでもしあわせのどまんなか」なのである。

今年は前任職の七回忌

今年には父の七回忌法要である。足利浄円先生の絶筆を偲びながら迎えたいと思う。父の母ノブ(私の祖母)が危篤のとき、父が学生時代の恩師である足利浄円先生に

法語をお願いしたら次のような手紙が帰ってきた。浄光寺に先生の絶筆として大切に残されている。

「私は今病んで居りまして筆執ることも出来なくなつて居ります。ご母堂様重態にあられますようにして一句の法語を送れとの御事、努力して今朝は鉛筆を執ることが出来ました。

これはご母堂様へのお話ではなしに、私が私への法語でございます。

私はあるがままのこの身が只今阿彌陀さまの本願力に摂取せられてお浄土へ方向づけられて、自致不退転してあることをしらしめられたことが、人間に生れてよき法に遇うことよろこびでございます。病苦がはげしいとお念仏を申されませぬままに摂取せられてあることをただうれしく存じて居ります。ナムアミダ仏 浄円

本願力にあいぬれば... 功德の法水みちみちて... もう書けませぬ」

足利浄円先生の絶筆



浄光寺住職 能美紹隆記